大宮公園内の施設

現在の大宮公園内にある各施設を紹介します。

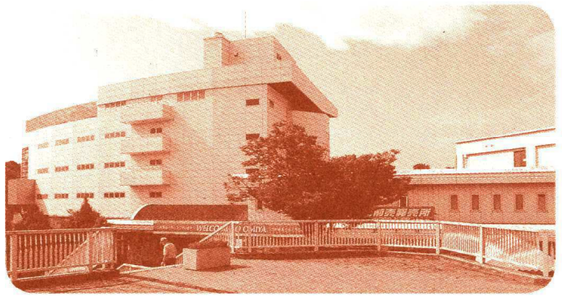
① 野球場

昭和９（1934）年に完成。同年日米野球が行われ、スタルヒン、ベーブ・ルース、ルー・ゲーリックなどが活躍しました。平成４（1992）年に新球場となり、埼玉西武ライオンズ戦が行われるとともに、県高校野球の聖地として漫画「おおきく振りかぶって」などの舞台にもなっています。

② 陸上競技場兼双輪場

昭和15（1940）年に予定されていた東京オリンピックの会場及び練習場として建設されましたが、国際情勢悪化に伴いオリンピックは開催されませんでした。

第二次世界大戦中には、高射砲陣地として改装する旨の申し入れを軍部から受けましたが、陸上競技関係者は「国土を守るのが軍の任務ならば、競技場を守るのはスポーツマンの使命である」と頑として応じませんでした。結局軍部が折れ、高射砲陣地は寿能城跡に建てられることになり、競技場は守られたのです。昭和24（1949）年には東日本初となる競輪が開催され、現在に至っています。



現在の陸上競技場兼双輪場

③ NACK5スタジアム大宮（大宮公園サッカー場）

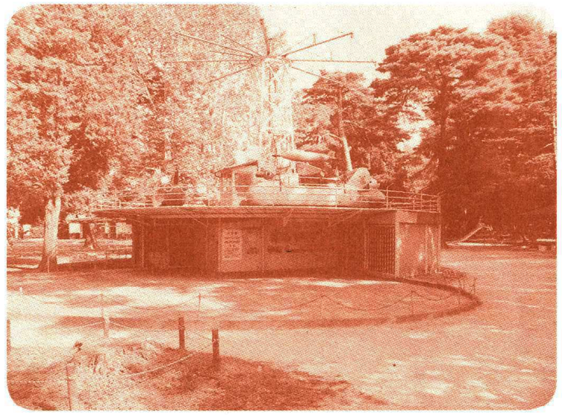
日本初のサッカー専用スタジアムとして昭和35（1960）年に完成し、昭和39（1964）年の東京オリンピックの会場の一つとなりました。平成14（2002）年の日韓ワールドカップの際には優勝したブラジル代表の練習会場になり、壁に選手のサインが残されています。

また、漫画「キャプテン翼」では全国中学生サッカー大会のメイン会場として描かれており、平成19（2007）年の改修時には作者の高橋陽一氏からメッセージが寄せられ、市報にも掲載されました。 現在は、大宮アルディージャのホームスタジアムとして全国のサッカーファンに親しまれています。

④ 小動物園

戦後まもなく、北海道から送られてきた小熊を公園で飼育したのが始まりです。開園60周年を迎えた今年7月には、改修や拡張工事が行われ、カピバラやクマなどの動物をより間近で見ることができるようになりました。

この他にも児童遊園地、県立歴史と民俗の博物館などが併設されています。

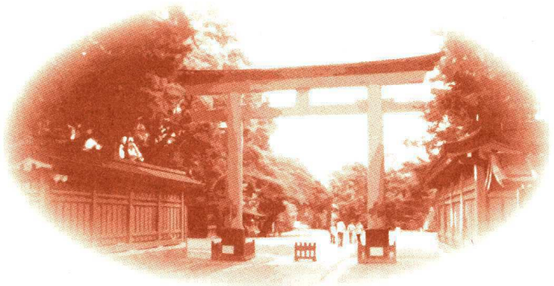


児童遊園地（万松楼跡地）

風景を楽しむもよし、文学の世界に思いを馳せるもよし、各施設を利用するもよしと様々な楽しみ方のできる大宮公園。一度足を運んではいかがでしょうか。

【参考文献】

・埼玉文芸家集団 刊行委員会『荒川流域の文学　埼玉をめぐる人と作品』さきたま出版会（埼玉文芸叢書）2006年
・秋山喜久夫『大宮文学散歩』丸岡書店（大宮雑記帳）1976年
・大宮市役所『大宮市史　第4巻　近代編』大宮市役所　1982年
・大宮市『大宮のむかしといま』大宮市　1980年
・さいたま文学館『企画展　大宮公園と文学者たち』さいたま文学館　1999年
・「ミュージアムヴィレッジ大宮公園」整備推進事業実行委員会『ミュージアムヴィレッジ大宮公園　連続講座ブックレット』「ミュージアムヴィレッジ大宮公園」整備推進事業実行委員会　2012年
・さいたま市立教育研究所「さいたま文学散歩」さいたま市教育委員会　2008年
・夏目漱石『漱石全集　第16巻』岩波書店　1967年
・樋口一葉『樋口一葉全集』筑摩書房　1979年



本棚ぶらり

『青年』

森鷗外著　新潮社　２０１０年

「わがまちsai発見」でもご紹介した『青年』は森鷗外初の長編小説です。

作家を目指して上京した「理想主義の看板」のような目を持つ青年・小泉純一は、同郷の友人に誘われていった青年クラブで大村荘之助に出会います。博識な大村と話すことで純一の精神は成長していきます。

純一を大宮公園に誘ったのは大村です。作家を目指しながらまだ何も書いていないという純一に「起とうと思えば、いつでも起てるのだからね」と励まします。

大村と交流を深める一方で、純一は劇場で出会った「切れ目の長い黒目勝の目に、有り余る媚がある」坂井れい子未亡人と関係を深めていきます。そして、彼女との別れを決意したとき、純一は「今何か書いてみたら、書けるようになっているかもしれない」と感じるのでした。

この小説には「毛利鷗村」という人物が登場します。「台所で炭薪の小言でも言っているのだろう」と純一に想像されている鷗村は、鷗外が自らを戯画的に書いたものです。他にも夏目漱石を「拊石」、下田歌子を「高畠詠子」というように実在の有名人をモデルにした人物が登場します。鷗外の作品には珍しいもので、作品にユーモアを添えています。

大人も楽しめる 絵本の世界 第５回

『月光公園』

東 逸子絵　宙野素子文　三起商行（ミキハウス）
１９９３年

今回紹介する絵本『月光公園』は、「夜の公園」が幻想的な世界の入り口となっている作品です。

この本の最大の魅力は、東逸子のエッチング（銅版画）による素晴らしい絵です。静謐なトーンの画面に幻想的な光に包まれた人物が浮かびあがり、読者の心に訴えてきます。

この他にも、児童文学には公園が舞台であったり、物語の重要な入り口となっていたりする作品が数多くあります。ぜひお手に取ってご覧ください。

《公園が出てくる、公園が舞台となっている作品》

○『かもさんおとおり』ロバート・マックロスキー文・絵　福音館書店　1965年
○『あさえとちいさいいもうと』筒井頼子作、林明子絵　福音館書店　1982年
○『こうえんのさんぽ』アンソニー・ブラウン 作・絵　佑学社　1980年
○『こうえんのいちにち』シャーロット・ゾロトウ文、Ｈ・Ａ・レイ絵　文化出版局　1989年
○『ふたごのひよちゃんぴよちゃん　はじめてのすべりだい』バレリー・ゴルバチョフ作・絵　徳間書店　2004年